

主 題：喜んで与える人へと成長する

聖書箇所：Ⅱコリント9：6－7

テーマ：喜んで与える者としてますます成長していく

今朝、私たちがともに見たいみことばは、コリント人への手紙第二9章です。きょうから恐らく3回にわたって皆さんと考えたいのは、タイトルにもあるように、喜んで与える人へと成長するという事です。私たちはこれから“与える”ということについて、もっと言えば神様にささげる献金というものについて改めてみことばから学んでいきたいと思えます。

ではなぜこのテーマを今回から学ぶのかというと、来年度から私たちは献金というものを改めて見直してみたいと思っているからです。そのことを皆さんと考えて、ともに祈っていくために、いま一度献金に関して聖書がどんなことを教えているのかを見ていきたいのです。これが一つの大きな理由です。でも、ある意味それ以上に、この喜んで与えることについて、私たちが学ばなければならない大切な理由があります。それはこの与えるということと、私たちの信仰生活との間には大きな関係性があるからです。別のことばで言うなら、私たちが自分のお金や持ち物をどのように扱っているかは、私たちが何に優先順位を置いて歩んでいるのかを明らかにしてくれるということです。自分自身のうちに、どんなプライドや罪があるのかを明らかにしてくれるだけでなく、私たちが何を一番に愛しているのか、何を大事に思っているのか、何に信頼を置いて歩んでいるのか、ささげる姿から私たちはそれらを見て取ることができるのです。だからこそ、私たちが自分自身の心を正しく吟味し、信仰の成熟をますます目指していくのであれば、この与えること、ささげることに関して聖書がどんな内容を教えているかを正しく理解することは、私たちにとって非常に重要なことです。そして、今回、私たちが見ていくⅡコリント9：6－15の部分には、そのことがはっきりと示されています。喜んで与える人へと成長していくために、必要な真理をここに見て取ることができるのです。パウロは特にこの箇所の中で、喜んで与える人へと成長していくために私たちが覚えるべき六つの動機を教えてください。その一つ一つを少し時間を取って、一緒に考えてみたいと思えます。

○歴史的背景：パウロとコリントの教会

これから学ぶ内容をより正しく理解するために、まず皆さんと一緒にこの手紙が記された背景、パウロとコリントの教会との関係について、少し思い返してみたいと思えます。

第2次宣教旅行の途中、コリントの町をパウロは訪れました。そしてパウロはそこに一年半の間滞在し、人々に熱心に福音やみことばを教えたのです。そして、その働きの結果、コリントの教会は誕生しました。それを終えて、パウロはその地を去って行きます。それから数年後、パウロは三度目となる宣教の旅へと出かけて行きます。そして、この第3次宣教旅行の過程で、彼はこれまで訪れたところ——第1次・第2次の旅行で訪問した町を一つ一つ訪問して行くのです。もちろん、その大きな目的の一つは、それぞれの教会がどのような歩みをしているかを確認することでした。でもそれとは別に、ある目的がその訪問には含まれていたのです。それはそれぞれの町を訪れて、当時、迫害やききんなどによってひどい貧困に苦しんでいたエルサレム教会に対する献金を回収することでした。パウロはそうやって町を巡りながら、苦しんでいるエルサレム教会を支えるための献金をいろいろな教会から集めていたのです。もちろんコリントの教会もその一つでした。彼らも当初、苦しんでいる兄弟たちがいるという知らせを聞いた時に、エルサレム教会を助けたいと強く願って、ほかの教会よりも先立ってその準備をしようとしていました。彼らは熱意にあふれていたのです。その余りの熱意は、ほかの教会の人々をも励ますほどでした。この彼らの姿が同じⅡコリント9：1－2に「1 聖徒たちのためのこの奉仕について

は、いまさら、あなたがたに書き送る必要はないでしょう。：2 私はあなたがたの熱意を知り、それについて、あなたがたのことをマケドニヤの人々に誇って、アカヤでは昨年準備が進められていると言ったのです。こうして、あなたがたの熱心は、多くの人を奮起させました。」と記されています。こうしてコリントの教会の人たちは、熱心さに満ちあふれ、すばらしい働きをしようとしていたのです。しかし残念ながら、その彼らの熱意が続くことはありませんでした。ある時点から、彼らが当初うちに持っていたその思いが消えてしまったのです。そしてその結果、彼らは初めに自分たちが与えますと約束していたことばのとおりにはふるまわず、その準備に遅れが出ていました。

それだけではなく、彼らのうちのある者たちは献金をする事自体を惜しむようになっていました。そのことも同じ9：5に書いてあります。「：5 そこで私は、兄弟たちに勧めて、先にそちらに行かせ、前に約束したあなたがたの贈り物を前もって用意していただくことが必要だと思いました。どうか、この献金を、惜しみながらするのではなく、好意に満ちた贈り物として用意しておいてください。」と。コリントの教会の人たちは最初、熱心さをもって与えようとしていました。でも、その熱心さは続くことがなく、その思いは薄れていったのです。薄れていって準備をしなくなっただけではなく、彼らは献金をする事自体を惜しみ始めました。だからパウロはその現状を危惧したのです。だからこそ、ささげることを渋っているコリントの兄弟たちに手紙を送って、なぜささげるのか、その動機を改めて示し、彼らが約束されていたとおりに贈り物を用意してくれるように励ましていたのです。これがこの手紙の背景、これから私たちが見る6節に至るまでの大まかな文脈でした。こんなコリントの教会の人々にパウロは手紙を書いたのです。

今、その教会の姿を思い浮かべた時に、改めて私たち自身もそういう弱さを持っていると思いませんか？ 私たちも最初は感謝にあふれていて、神様や人に喜んでささげよう、そんな願いを、そんな熱意を持っていたりするのです。でも、そんな思いを持っている時に、何か別の思いが入ることによって、それが揺るがされてしまうことがあったりするのです。例えば、日常生活において必要が満たされていないければ、最初は与えようと思っていたけれども、自分の必要が満たされなくなってきたら、不安や恐れを抱いてささげることをためらうかもしれません。また、自分の状況が周りと比べてひどくなれば、だれかの必要のために与えようと思っていたけれども、自分が受けることだけに心が支配されるようになってしまうかもしれません。こうして考える時に、コリントの人々だけでなく、私たちひとりひとりもいつも喜んで与えるということにおいて、弱さや難しさを抱えていたりするのです。だからこそ、こうやってⅡコリント9：6－15を見ていくのですけれども、このパウロのことばを見る時に、今の私たちにとっても非常に大切なものを見ることができるとは思います。

○喜んで与える人へと成長する：六つの動機

今確認した文脈と背景を頭に入れて、実際の内容を見ていきたいと思えます。このみことばを通して、私たちひとりひとりが喜んで与える者へと変わる助けになることを心から願っています。

では、まず6－15節のみことばをお読みします。きょう、私たちが見るのは6－7節です。

Ⅱコリント9：6－15

「：6 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。：7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。：8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。：9 「この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。」と書いてあるとおりにです。：10 蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。：11 あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。：12 なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒た

ちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。:13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。:14 また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。:15 ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」

1. 喜んで与える人は神様からの祝福を期待できる 6節

さて、まず一つ目の動機として教えられていたことは、喜んで与える人は神様からの祝福を期待できるということです。どういうことかということ、6節は「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」と始まっていました。この箇所を読んだ皆さんはすぐに気づかれたことだと思いますけれども、パウロはここで農業に関する例えを用いていました。農家が種蒔きをしているその姿を通して、与えることに関する重要な真理を伝えようとしていたのです。ここでは特にふたりの農家の姿が描かれていました。ひとりはいくらか蒔く者であり、もう一人は豊かに蒔く者でした。少しだけ蒔く者とは一体どんな人のことを言うのでしょうか？この人物は種を蒔くことにおいて、ためらいや迷いを持っている者のことです。持っている種を惜しみなく使うのではなく、けちけちして渋るような人物だということです。では逆に、豊かに蒔く者とはどんな人のことを言うのでしょうか？この人物というのは種を蒔くことにおいて、ためらいや迷いのない者のことです。種蒔きをする季節になれば、豊かな収穫を期待して持っている種を出し惜しみすることなく使うのです。二つの人物像を見て取ることができました。

そのことを踏まえて、少し想像してみてください。春になって種蒔きをする季節がやって来ます。ふたりの農家が広大な自分の畑に出て行くのです。

1) 少しだけ蒔く者

片方が自分の畑に着いて、種がいっぱいに入った袋に手を入れ、今にも種を蒔こうとしました。しかし、その時にいろいろなことがその人の頭をよぎるのです。もしかしたら、この先、嵐が起こって、洪水で畑が流されてしまうかもしれない。もしかしたら、この先、雨が全く降らずに土地が渴き切ってしまうかもしれない。そうすれば、せっかく植えたものがだめになってしまう。それならとりあえず大部分は残しておいて、少しだけ種を蒔こうと。彼は持てる種を惜しみなく使うのではなく、ためらい渋りました。収穫のことよりも、今自分の手元にある種を重んじたのです。こうして彼は少しだけ畑に種を蒔きました。季節は過ぎ去って、収穫の秋がやって来ます。この人物は自分の畑へと収穫のために出向いて行きます。想像してみてください。その畑は一体どのようなになっているのでしょうか？容易に想像できるように、そこには残念ながら収穫できるものはたくさんありませんでした。この人物は少ししか蒔かなかったから、少ししか刈り取ることができなかつたのです。

2) 豊かに蒔く者

さて時を戻して、今度はもう片方の農家のことを考えてみましょう。種蒔きをする季節になり、彼も同じように種がいっぱいに入った袋を持って自分の畑へとやって来るのです。先ほどの人物と同じように、この先どんなことが起こるのかは彼も知りませんでした。しかし、そういったことに心がとられるのではなく、彼は豊かな収穫を期待してその日を楽しみにしながら、惜しまず余すところなく、持てる種を畑に蒔きました。その手に残っていたものは何もなく、ただいっぴいに種が入っていた空の袋だけがそこにはありました。季節は過ぎ去り、収穫の秋がやって来ます。この人物も畑へと収穫のためにやって来るのです。では、その畑はどのようなになっているのでしょうか？容易に想像できるように、そこにはあふれんばかりの穀物が満ちていました。自分ひとりの手には負えないほど、収穫物でいっぱいになっていたのです。

さて、皆さん、一体何がその違いを生み出したのでしょうか？ここでの違いは、種を蒔いたか蒔いていないかではありませんでした。違いは、彼らがどのように種を蒔いたかでした。ひとり目の農家は種を失うことを嫌って、惜しんで少しだけ蒔いたからこそ少しだけを刈り取りました。ふたり目の農家は豊かに蒔いたからこそ、豊かに刈り取ることができました。惜しまずに蒔いたからこそ、あふれんばかりの祝福を得ることができたのです。つまり、ここでの鍵は、どのように蒔くかがどのように刈り取りをするのかを決めるということです。もっと言えば、どのように与えるかがどのような祝福を手にするのかにつながるということです。惜しんで少なく与える者は少なく刈り取り、豊かに惜しみなく与える者は豊かな祝福を得ることができると言うのです。これを聞くと、ある人はこう思うかもしれません。ちょっと待ってください、惜しみなく与えればより豊かになれるというのは、まるで繁栄神学が教えているような話ではないですか、ささげればささげるほどますます祝され、さらなる富を手にすることができる、パウロはそんなことを教えているのですかと。もちろんそうではありませんでした。ここで勘違いしてはいけないのは、パウロは繁栄神学が教えるようなことを口にしていたのではないということです。彼は何も与えれば与えるほど物質的に豊かになっていくとか、この世でますます快適な生活が保証されるといったことを教えていたのでは決してありませんでした。

そのような教えは、パウロだけではなくて聖書全体を考えても見出すことはできません。ましてやこの手紙を記したパウロ自身の姿を考えてみれば、それがいかに間違った考えなのかを見て取ることができます。パウロの地上での人生は、まさに貧しさや苦しみがつきものでした。彼の信仰のあかしが同じⅡコリント 11：27にも記されていました。「**労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。**」、彼はこんなことばを残していました。パウロが経験してきたことは本当にひどいものでした。飢え渴くことがあったのです。食べ物がないことがありました。寒さに凍え、裸でいたこともありました。では、彼がそのような苦しみや貧しさを覚えていたのは、彼が豊かに与えなかったからでしょうか？そうではありません。彼は豊かに与えて、喜んで主と人々に仕える人物でした。主に対していつも忠実に歩もうとしていたのです。でも、そんな彼が飢え渴きを覚え、寒さに凍えていました。パウロがここで惜しみなく与える者は豊かな祝福を手にすると言ったのは、この世における物質的な豊かさや快適さを約束しているわけではないということです。

では、パウロは何を教えようとしていたのでしょうか。ここで言えることは、惜しみなく種を蒔く者には神様が惜しみなく豊かに報いてくださるということです。喜んで与える人にはそれに見合う祝福を神様が後に与えてくださると、そう期待することができるのです。豊かに種を植えたら豊かに収穫することができる、それを期待することができる。私たちが神様や兄弟姉妹の必要のために喜んで与える時、私たちはあることを確信することができます。それは私たちの与える物はどこかに消えて消滅してしまうのではないということです。私たちが与える時に、確かに私たちの手から逃れてなくなったかのように思いますけれども、それがその後で必ず実を实らせ、収穫することができることを確信することができるのです。惜しみなく豊かに与えれば、神様はそれを喜んでくださり、そのような者を大いに祝してくださるのです。主の働きのためにささげるもの、それは決してむだになることはない。喜んで与える者には、収穫の日が待っているということを教えてくれています。

振り返ってみれば、これと同じような教えは箴言の中にも繰り返し記されていました。箴言 11：24-25には「**：24 ばらまいても、なお富む人があり、正当な支払いを惜しんでも、かえって乏しくなる者がある。：25 おおらかな人は肥え、人を潤す者は自分も潤される。**」、また、同じ箴言 19：17にも「**寄るべのない者に施しをするのは、【主】に貸すことだ。主がその善行に報いてくださる。**」とあります。また、旧約聖書の著者だけでなく、イエス様ご自身もルカ 6：38で「**与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れ**

てくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらからです。」と述べておられました。このようにして、豊かに種を蒔く者は豊かに刈り取ることができるという教えを見て取ることができます。

ここで少し考えてみてください。私たちがささげることにおいて、どんな時にためらいや躊躇を覚えたり、与えることを惜しんでしまったりするのでしょうか？例えば、自分の持っているものをどうしても失いたくない、手放したくないと思う時がそうかもしれません。また、嵐やききんがあるかもしれないと不安になって、ためらった農家のように、先が見えない状況で心配や恐れが自分を襲ってくるような時もそうかもしれません。私たちが今自分の手元にある種を守ることに心が奪われ、後の収穫のことを忘れていた時もそうかもしれません。いろいろな理由を挙げることはできます。でも、言えることは、私たちは喜んで与える時にためらいを持ったり、躊躇してしまう、そんな弱さを持っていたりするのです。そんな私たちに対して、パウロはこんなことを教えてくれています。主のために喜んで惜しみなくささげる者は、実りなく終わることは決してないと。必ず神様がそれに報いてくださると。かつてジョン・カルバンも種蒔きとその刈り入れに関して、著書の中でこのようなことばを残していました。「種蒔きをする時、種は手で蒔かれ、地面のあちこちに散らされ、くわで耕され、しまいには腐ってしまう。こうして種はまるで無くなってしまったかのように見える。施しについても、まったく同じことが言える。あなたから他の人のもとへと出ていくものは、それだけあなたの財産を減らしているように思える。しかし、刈り入れの時が来れば、その実を取り入れることができるのである。……この教えを私たちの心の内で深く根付かせなければならない。そして、肉の思いが失うことを恐れ、善を行うことから私たちを遠ざけようとする場合には、すぐにこの盾をかざして、そのような思いから自分の身を守らなければならない。……『しかし、主は私たちが今、種蒔きをしているとはっきりと述べておられる。』」と。

私たちが神様の働きのために、福音のために、教会や兄弟姉妹のためにささげ物をする時に、与える時に、わたしたちは自分の持っているものを失っているのではありません。確かにその時に肉はこう言うかもしれません。種がどんどんどんどん消えてなくなってしまっています、これ以上は無理です、ここまではささげられるけど、ここからは譲れません、自分のものです、これ以上は失いたくありませんと。でも覚えるべきことは、私たちが惜しまずに主のために与える時、私たちは主の畑に種蒔きをしているにすぎないということです。そしてもし私たちが主の畑に種を蒔いているのであれば、必ず後に主によって、それを大いに収穫することができる日がやって来ると期待することができるのです。すぐに実を見ることがなかったとしても、主のためになす働きは、後で必ず実を見ることができると。だとすれば、私たちが考えなければいけないことは、どんなふうになすかということ。大切なのは何に心をとめるかです。今、自分の持っている種を失わないように、それを一生懸命に守ることに心をとめるのか、それとも刈り入れの日の収穫物に心をとめるのかどちらかです。惜しんで少しだけ蒔く者は少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は豊かに刈り取るのです。私たちがそのことを知っているなら、収穫の日、一体どんな状態の畑を望むでしょうか？主のために喜んで惜しまずにささげるものは決してむだにはならない。必ず主が報いてくださるという期待、これが成長を目指していく私たちが覚えておくべき一つの動機でした。私たちの働き、私たちの与えるささげ物はむだにはならないと。

2. 喜んで与える人は神様に喜ばれる 7節

続けて、二つ目の動機として教えられていたのは、喜んで与える人は神様に喜ばれるということです。そのことが7節に「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」と記されていました。6節で、豊かに惜しむことなく蒔くことの大切さについて教えたパウロは、今度は与えることにおいて、非常に大切な真理を

付け加えてくれていました。神様の前に問われるのは、何をどれだけ与えたのか以上に、どんな心でそれを与えたのかということです。私たちの心のうちをご存じの神様は、どんな思いや動機で私たちがささげているかを注意してごらんになっているのです。だから豊かに与えたでしょ、だから何でもいいでしょうとはなりません。神様の前に喜ばれるささげ物には、喜ばれるささげ方があるとパウロは言うのです。

●惜しみなくささげること：五つの原則

ここにささげる時の五つの具体的な原則が記されていました。

1) ひとりひとり

まず一つ目に挙げられていた原則は「ひとりひとり」でした。言いかえれば、惜しみなくささげるというのは、クリスチャンひとりひとり、それぞれに与えられた責任だということです。個々人が負っている責任だということです。ここで少し手紙が記された背景を思い返してください。パウロはコリントの教会を含むさまざまな教会から、エルサレムの教会の兄弟姉妹に対する献金を募っていました。そうしていろいろなところから集めたものを一つにして持って行くつもりでいたのです。だとすれば、この事情を知っている者の中にはこう思った者もいたに違いありません。どうせ教会全体で集めるのであれば、自分がしなくてもほかの人がすればいいでしょうと。自分ひとりがささげなくたって大した違いにはならないでしょと。でもみことばを見る時に、それは間違った考え方でした。パウロはそんな誤った考えの人たちが出てこないように、まず基準を明白に口にします。献金というものは、ひとりひとりが喜んでささげるものであって、ひとりひとりが神様の前に負っている重大な責任なのだ。信仰者にとってささげるということは、個々人に与えられている大きな責任でした。その責任は、貧しい者であろうが、富んだ者であろうが、どんな人であろうと変わることはなかったのです。ひとりひとりとはひとりひとりでした。惜しみなく与えることはひとりひとりの働きでした。

2) いやいやながらでなく

二つ目に挙げられていた原則は「いやいやながらでなく」でした。パウロは与えるということがひとりひとりの責任だと述べた後、同時にいやいやながらそれをなすのではないと言うのです。この「いやいやながらでなく」ということばは一体どういう意味でしょう？このもとのことばをそのまま直訳すると、「悲しみから」とか「悲痛の思いから」と訳すことができます。要するに、いやいやながらささげないというのは、ささげることがその人にとって悲しい、辛い思いからなされるのではないということです。悲しい思いを持ち続けながらささげるのではないと、パウロはここで明白にしています。

例えば何かを与える時に、自分の手からそれが離れていく様子を見て、失われていく様子を見て、心のうちで嘆いてそれをするのではないということです。また兄弟姉妹の必要を満たそうとする時に、やっぱり自分のために使っておけばよかった、そういった後悔をすることは無いということです。ですから、いやいやながらささげる人というのは、たとえ何かささげていたとしても、それが心の重荷となっているような人物です。そこにはいつも喜びなどなくて、悲しみや躊躇、ためらいというものがあるのです。しかし、そんなものを神様はよしとはされないということです。いやいやながらささげる物は神様の前によしとはされません。心に悲しみを抱えながら、いやいやながらささげるのではなく、喜びのうちにささげることが神様の前に喜ばれる態度でした。

3) 強いられてでもなく

でも、それで終わりではなかったのです。三つ目に「強いられてでもなく」ということばが続いていました。私たちがささげる態度は、いやいやながらやるものでもなければ、だれかに強いられて行うものでもなかったのです。ささげるというのは、私たちが内側の悲しみを持ったままするものでもなければ、外側からの圧力によって強制されてするものでもないということです。ここでパウロが強いら

れてでもなくと口にした時、どんな思いで言ったのかを私たちは容易に想像できます。パウロはコリントの兄弟姉妹たちに対して豊かに与えることを求めていました。彼のことばを耳にした者の中にはこう思った者がいるはずです。パウロが言うなら仕方ない、本当はやりたくないけど、彼を怒らせたくはないからささげるしかない。こうしてだれかほかの人がやれと言ったからささげる、そういった間違った態度に陥る危険性がありました。だからパウロは、ささげるというのは、だれかに言われたからするものでも、強制されたからするものでもありませんと言うのです。ささげるというのは、どんな時もみずから進んでなすものなのだ。

そして、これは私たちにとっても同じことです。私たちが与えるのは、何も教会のリーダーである長老や執事、そういった者たちがそうしなさいと言ったからするものではありません。自分の周りの兄弟姉妹たちがささげている姿を見て、やらなければいけないのだと、そんな罪悪感を覚えたからするものでもありません。また、だれかにささげていない自分の姿を知られたらまずいと、自分の体裁を保つためにするのでも当然ありません。私たちはそれぞれがみずから進んで、いやいやながらも、強いられてでもなくささげるのです。私たちがささげる時、外側の者が私たちの心の思いを邪魔させたらだめなのです。私たちが主の働きのために教会にささげようとする時に、私たちが兄弟姉妹の必要を満たそうと何かを与えようとする時に、私たちは一体どんな思いでそれをなしているのでしょうか？どんな思いが私たちの心を動機づけているのでしょうか？悲しみからそれをするのでしょうか？周りの何かの影響を受けたから、それをするのでしょうか？それともみずから喜んで進んでそれをするのでしょうか？

4) 心で決めたとおりに

四つ目に挙げられていた原則は「心で決めたとおりに」でした。私たちひとりひとりがささげるのは、いやいやながらも、だれかに強いられてでもなく、自分自身が心で決めたとおりにすることが重要だったのです。ここで「決められたとおりに」と訳されていることばは、新約聖書の中でこの箇所にはしか使われていないもので、これには「前もって決める」とか、「前もって選ぶ」といった意味が含まれています。つまりこのことばを用いてパウロが言わんとしたことは、人がささげ物をする時に、人が何かを与えようとする時に、それはあらかじめ決められたもの、みずからが考え、計画的にささげられるものでなくてはならないということでした。意図的にそれをささげるのです。逆を言えば何も考えることがなく妥協したものを与えたり、余ったものを神様にささげるということとはしないということです。私たちはそれぞれがささげるという責任を負っていて、それぞれが何をどれだけささげるのかを祈り求めながら、自発的に決めていくのです。だれかがそれを決めるものではありません。自分がそうやって祈って、神様の前に喜んでささげていくのです。

考えてみてください。ある人は教会にやって来て、献金をささげるまさにその時になってからどうしようと悩むかもしれません。その時に気の向くまま、思いのままにささげているかもしれません。また、いざささげ物をしようとする時、こんなことを心の中でつぶやいているかもしれません。財布を見た時、今の自分の手元にはこれだけしか残っていない、だからこれだけささげよう。あるものをささげよう、神様は仕方ないとわかってくださると。そんな人に対して、パウロがはっきりと言うのは、そのような態度は主の前に信仰者としてふさわしくないということです。私たちには、それぞれが自分の心で決めたものをあらかじめ用意し、みずから喜んでささげることが求められていたのです。

パウロはこれと同じことをIコリントの中でも語っていました。Iコリント16:2を見ると、「私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおののおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。」と記されています。ですから私たちにとってささげることは決して受け身的なものではないということです。信仰者はひとりひとり、だれかに

言われたからではなく、自発的に祈りをもってよく考えて、意思をもってささげることが大切なのです。そして、そのようにして、心で決めてささげるささげ物を主は喜んでくださるのです。

5) 喜んで

そして最後五つ目に挙げられていた原則は「喜んで」でした。7節の最後に「神は喜んで与える人を愛してください。」と書いてありました。喜んで与える人とは一体どんな人のことでしょうか？この人物はいいややながらでもなく、強いられてでもなく、心で決めたものを喜んでささげる者でした。彼にとって主のためにささげることは、決して悲しみをもたらすものではなかったのです。それは最高の幸せを、喜びをもたらすものでした。だからこそ、彼はどんな状況であろうと、ささげ物をささげたいからささげようとするのです。まさにマケドニヤの兄弟姉妹たちの姿がそうでした。同じⅡコリントに喜びにあふれた彼らの姿がこのように描かれています。8：1－4に「:1 さて、兄弟たち。私たちマケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。:2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。:3 私はあかします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、:4 聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。」と書いていました。マケドニヤの兄弟たちはみずから進んでささげようとする者たちでした。彼らもコリントの教会の人たちと同じように、エルサレムで困窮している信仰者たちの話を聞いて、喜んで持てる物をもって与えようと思いました。困っている兄弟姉妹たちを助けよう、支えようとしたのです。しかし、驚くべきなのは、彼らは自分たちが物や富にあふれ、豊かだったからそれをしたのではなかったということです。「苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」と書いていました。彼らは激しい試練を経験し、ひどい苦しみを味わっていました。彼らは極度の貧しさを覚えていました。彼らのうちに余裕などというものはなかったのです。自分たちの生活もままならないほど、何も持っていませんでした。でも、そんな中であって、なお彼らは喜びにあふれて、惜しみなく犠牲を払ってささげようとしたのです。置かれている環境や状況が彼らの行為を妨げることはありませんでした。彼らは自分たちの持っているものを惜しみなく喜んで与えようとする者たちだったのです。

一体なぜ彼らはそんなふうになることができたのでしょうか？どうして彼らはそんな状況の中で喜んで与えることができたのでしょうか？一つ確かに言えることがあります。それは、彼らの心がただ神様のうちに満足を見出していたからでした。言いかえれば、彼らは自分たちの持ち物や富のうちに、自分たちの幸せや喜びを見出そうとしてはいなかったということです。もし彼らが自分たちの持ち物や富のうちに喜びや満足を見出そうとしていたのだとすれば、それらのものが自分たちから取り去られて行った時に、彼らの心から幸せや喜びは失われていったことでしょうか。しかし、そうではなかったのです。彼らは自分たちが喜んでささげる時、それがほかのだれでもない、愛する神様に対してささげているということを知っていました。そのことを通して神様の栄光を現すことができると覚えていました。彼らはそうやってだれに目を向けるべきなのかを心にとめていたからこそ、どんな状況であろうと変わらない喜びや満足を見出すことができたのです。そして彼らは、自分たちだけが喜びに満ちあふれて、それでよしとしたわけではなく、その喜びをほかの人にもみずから進んで分かち合おうとしていたのです。そして、そのように喜んで与える人を神様は愛してくださるのです。この真理は今の私たちにとっても同じです。神様はいいややながらでなく、強いられてでもなく、みずから進んで喜んで与える、そんな人を喜んで愛してくださるお方だということです。

では一体どうして喜んで与える人を神様は喜ばれるのでしょうか？それは、ほかのだれでもない神様ご自身がみずから進んで惜しみなく与えてくださるお方だからです。そんな神様によって救われた者たちが、恵みを受けた私たちが、同じようにその恵みをほかの人に与えようとする時、その神様のす

ばらしさがますます多くの人の目の前で明らかにされていくのです。私たちが人々に喜んで惜しみなく与えようとする時に、神様は私たちを用いて、私たちが与えるのではなく、もともと与えてくださる神様がほめたたえられるようにと。そのようにして働かれるからこそ、喜んで与える者を神様も喜んでくださるのです。だからこそ、私たちもだれに目を向けるべきなのかということをいつも心にとめていなければいけません。私たちの神様は、その豊かなあわれみによって、ご自分に逆らう罪人のために、御子イエス・キリストを送ってくださったお方でした。私たちが神様を愛したのではなく、この方が私たちを愛してくださったのです。神が実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛してくださったのです。それは、私たちがこの方の前に何か受け容れられることをしたからではありませんでした。私たちの良い行いに対する見返りとして、神様が救いを与えてくださったのでもありませんでした。本来であれば、その罪のゆえに御怒りだけを受けるべき私たちに対して、ただ恵みによって、キリストの十字架にあって罪の贖いを成し遂げ、この方を信じ、受け容れる者にその罪の赦しを与えてくださったのです。それがこの恵み豊かな神様でした。与えてくださる神様でした。

だからもしまだこの主を自分の救い主として信じていない方がいるのであれば、どうかきょうこの神の前に出て罪を悔い改め、この方を信じ、受け容れてください。この方はご自身の前に、砕かれて出て来る者に救いを与えてくださる恵み深い、あわれみ深いお方です。このすばらしい主と救いをきょう自分のものとしてください。今、この主を信じて歩んでおられる皆さん、神様はこれほどまでに恵み深いお方でした。この主を個人的に知っているのであれば、そしてこの方が私たちが喜んで与える時に私たちのことを喜び愛してくださるのであれば、この真理がますます喜んで与える者へと成長していきたいという動機にはならないでしょうか？喜んで与える時に、神様も喜んでくださる、ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心に決めたとおりに喜んで与える人を神様は喜んでくださる。これこそが成長を目指す私たちが覚えるべき二つ目の動機でした。

〇まとめ

さて、私たちはきょうから喜んで与える人へと成長するということを考え始めました。

そして、喜んで与える人へと成長していくために覚えるべき大切な六つの動機のうちの二つを見たのです。一つ目は、喜んで与える人は神様からの祝福を期待することができるということであり、二つ目は喜んで与える人は神様に喜ばれるということでした。改めて振り返ってみて、自分自身がこれまでささげている献金の姿とみことばが教えている献金の姿、皆さんがそれぞれ与えている態度とみことばが求めている与える者の態度を見比べる時に、私たちはどうでしょう？皆さんがどうかはわかりませんが、私自身はこの箇所を学んでいる時に、いかに自分が与えることにおいてまだまだ足りない者であるかを考えさせられました。心が責められました。しかし同時に、喜んで与えるということがいかにすばらしいことなのかも再度覚えることができました。願わくは、皆さんも同じであればと思います。

これから私たちは、来週、再来週と残された四つの動機を見ていこうと思います。そこにはもっとすばらしいことが書かれています。続けてみことばを学んで、学んだみことばを喜んで実践する者として、忠実に歩む者としてともに成長していきましょう。